

## 随 想

東南アジア鉄鋼協会の勤務を終えて  
(東南アジアにおける仕事と生活)

満岡正彦\*

筆者は、昭和 57 年 6 月より 60 年 3 月まで、東南アジア鉄鋼協会 (South East Asia Iron and Steel Institute—SEAIISI) に勤務し、このたび帰国した。60 年 3 月、東南アジア鉄鋼協会の東京大会の開催時、東北大学の徳田教授より、その経験を随想風にまとめ、会員諸氏に紹介して欲しいとの御要望があり、筆をとった次第である。

ちなみに、日本の鉄鋼業界から、東南アジア鉄鋼協会への事務局長の派遣は、吉武英吉氏 (当時新日鉄、現在、日本鉄鋼協会) 板岡隆氏 (当時日本鋼管、現在、東永金属) に次いで、三代目にあたる。

東南アジア鉄鋼協会の活動内容については、会員の皆様方もよく御存知であり、詳述は避けるが、その目的は、東南アジア地区の鉄鋼業の発展を促進することであり、具体的な方法として、東南アジア諸国、を主体とした、メンバー国の政府・工業諸機関の相互の地域協力、国際会議の開催技術誌・ニュースの発行、鉄鋼統計資料の作成などがあげられる。

昭和 57 年春、東南アジア鉄鋼協会勤務の内示をうけた後、東南アジアに駐在経験のある人に面会をし、仕事や生活上の助言をうけた。筆者は、若い頃欧州に留学した経験はあつたが、東南アジアについては未知の経験であり、それらの助言は、私にとって非常に参考になつた。仕事についてのほか、気候、衛生、治安、などについて、貴重な意見を賜つたが、ほとんどの人が「良い経験であつたし、勉強になつた。」と回答していただいたので、赴任前の不安は大分解消した。

57 年 5 月半ばにマニラに入り、6 月より、事務局長として仕事を始めたが、まず住宅を選定する必要がある。川崎製鉄マニラ事務所の応援をうけ、貸家めぐりを始めた。選定のポイントとして、戸締りが厳重か (窓に鉄格子があるか)、生活用水が階上にまで、十分供給されるか、バスタブがあるか (シャワー丈の所もある) などを基準にして住宅を選定した。筆者は、仕事の都合でマニラに不在のことも多いので、家族を呼びよせた場合の安全を考えて、マンションを借りることにした。幸いマンションのオーナーが、フィリピンの有力者で、テニスコート、プール、ボウリング場付のスポーツクラブとゴルフクラブの会員権を無料で貸してくれた。マニラ滞在中このオーナー (Mr. Napoleon MADALES) には公私にわたつて随分とお世話になつた。

\* 川崎製鉄(株)製鉄エンジニアリング技術部

次に女中さんを備うことであつたが、良い人を備わないとあとでトラブルの種になるとのこと。現地駐在員の人で、女中運?がなく、10 人変えたとか 12 人変えたとかいう人もいるくらいである。幸い知人の紹介で良い女中さんにあたり、3 年の駐在中、同じ人が働いてくれた。彼女は以前に日本人の家庭で働いたこともあり、飲料水は必ず煮沸してくれ、日本料理も少しはできるので、安心できた。

次に車の運転手だが、いい運転手を備えるかどうかで、仕事や生活の事情が一変する。私の運転手は会社の運転手で、前任の板岡氏からの引継ぎであつたが、真面目にして明朗、時間にも几張面であり、電気修理工もやつたことがあり、アパートや電気製品の故障も簡単なものは直してしまうくらいで、他の駐在の人から、羨ましがられた。このように東南アジアでの生活は、比較的順調に始まつた。しかし今考えて見ると、赴任前収集した情報だけでは、不十分で、自分で体験しないと分からない部分が多い。治安、衛生、気候、などについて、細かい配慮が必要であり、守るべきポイントも多いが、今回は誌面の都合で省略したい。

東南アジア鉄鋼協会の事務所は、従来はシンガポールに存在したが、昭和 56 年 12 月、フィリピンのマニラに移転した。マニラ事務所は、マカティ地区 (日本で言えば、丸の内ビジネス街にあたる) から車で、10~20 分のオーテガス地区 (日本で言えば、晴海に当たると考えていただければ良い) にある。スタッフは私を入れて 12 名で、私のほかは全部フィリピン人である。スタッフも、スペイン人との混血あり、中国人との混血ありで、日本のように、均質な人種構成でないことが面白かつた。

赴任当初当然のことだが、仕事の指示、報告、書類、書簡すべて英語で、机の上の英文の書類の山に恐れをなしたものだつた。英語での失敗談は数多くあるが、ここでは、その一部を御披露する。赴任してすぐ、スタッフの仕事をやリソグしたが、あるスタッフが、私は「Book keeper です」というので、はじめは図書掛と思つていた。後、そのスタッフに、ある技術誌をもつて来ることを頼んだところ、「私は図書の担当でない」という答えで驚いたことを覚えている。また、私が外出して帰つて来ると、スペイン人との混血である秘書の Miss MARTINEZ が、「Would you like to drink, tea, coffee or milk?」と聞いてきた。急に、周囲のスタッフが笑い出す。私がどうして皆が笑つているのか分からずにいると筆者に「ミルクといえ」という。あとで分かつたのだが、私の秘書の「milk」の発音が「lk」が聞こえず、「me」と聞えるため皆笑つた訳である。ユーモアを解し、英語を理解する会員の皆様に種明しする必要はないと思うが、他のスタッフは彼女の質問を、「お茶」、「コーヒー」、それとも「私」のどれをお飲みになりますか? と解釈した訳である。

マニラ事務所で仕事をしていると、フィリピンの旧宗主国である、スペインやアメリカの影響をかなり受けていることが分かる。本質的には、東洋人の性格をもち、ある意味では、日本人より人情的で、明治、大正時代の日本の人情もこうであつたかと思うことが少なくなかつたが、少なくとも仕事の上では、西欧の影響をうけて個人主義である。日本的なマインドに立つて、仕事のシステムを作り、スタッフ間の情報の流れを良くするため、定期的会議をしたり、ボーリングを一緒にプレーしに行つたり、春秋年2回、皆で旅行に行つたりした。とくに春秋2回の旅行は全部のスタッフが楽しみにしており、スタッフの兄弟姉妹、従兄など、家族の人も参加するので、スタッフの2~3倍の人が参加した。現在の日本の核家族社会に見られない。暖かいハートを感じたものだつた。

事務局長としての仕事は、スパンが広く各メンバー国との連絡、鉄鋼工場への訪問と技術者との意見交換、日本鉄鋼協会をはじめ、他の国際鉄鋼協会との協力などの国際的な仕事のほか、事務所の総務、人事、厚生、資金などの仕事があつた。日本のように組織がきつちりとしていて、自分の業務範囲が明確である場合と異なり、自分一人でもなんでも行わねばならず、最初はとまどつたものだつた。仕事のレベルも、上は各国の、大臣クラスとの交渉から、下は、小使いのような雑用まで、こなす必要があつた。しかし筆者にとつては、初めての体験であり、貴重な経験であつた。重点的な仕事として、年2回の国際会議の開催があつた。

春と秋各1回ずつの国際会議開催とその準備のため、メンバー各国を訪問する必要がある、マニラに半分、あとは、各国に滞在しているという渡り鳥のような生活が始まつた。

著者の在任中、タイバンコック、パタヤ(昭和57年9月)インドネシア-ヨグジャカルタ、(昭和58年4月)、台湾-高雄(昭和58年9月)、オーストラリア-メルボルン、シンガポール(昭和59年3月)、東京(昭和60年3月)と都合6回、6カ国で会議が行われた。会議の準備のため、開催前に少なくとも1回、会議の開催のため、約10日間、現地に滞在して仕事をする必要があつた。会議期間中、各国代表からなる理事会、技術委員会があり、さらに論文発表、工場見学、開会セレモニーなど、多くの行事を滞りなく遂行する必要がある。上に挙げた仕事は、各国のスタッフ、10ないし20名と英語で遂行していく必要がある、いろいろの失敗をしたが、恥をしので、数例を挙げてみよう。

その1 各国代表からなる技術委員会では、事務局長が議長を司さどることになつている。英語で会議を遂行するので、意見を発表されても、意味が分からず議長席で立往生することがしばしば—そのたびに隣に座っている私のアシスタントの Mr. A. LAGAYAN に「彼は何と

いつているか?」とひそひそ声で聞く始末。しかし、技術委員会は東洋人の特長である人情厚い人達の集まり、議長あやうしと見るや、「私はこう思いますが、どうですか議長殿?」と他の人の助け舟。筆者は、イエス、イエスと首をたてにふつているとさらに他の人が、「私も議長殿に同感!」と賛成演説が出て、めでたく議論は収束。

その2 やはり技術委員会での話。ある議題について意見も出つくしたので採決に入つた。委員の1人が Move と挙手をし、他の人が Second と言つたので、連想ゲームではないが、野球のセカンド盗塁のイメージが頭をよぎつたりした。後で意味が分かり、なるほどと納得したが、公式の会議の進め方について、欧米では大学に専門のコースもあると聞いた。日本のように単一民族で、会議を進める場合、お互いの気心で、会議の議決をしてしまうことも可能だが、国際間のミーティングの場合、あとでトラブルのないようかつちりと会議を進めて行く必要がある。とくに将来国際舞台で活躍する若い技術者の皆様には、会議の進め方を勉強しておかれることを希望したい。

その3 東南アジア鉄鋼協会大会の開会式のあと、各国の鉄鋼の権威を招待して、記念講演をしていただくことになつている。たとえば、タイ大会では、「発展途上国における新鉄鋼技術の応用」と題して、ドイツ鉄鋼協会の SPRINGORUM 博士に、オーストラリア大会では、「鉄鋼戦略」と題して、オーストラリアの B.H.P. 社会長の Sir James McNEIL 氏に講演していただいた。インドネシア大会では、台湾の中国鉄鋼会社の T. H. Fu 社長に、「発展途上国における鉄鋼業の発達—中国鉄鋼会社の場合」という題で講演をお願いした。事務局の準備が悪く、会議予定が2時間も遅れてしまい、午前の子定が、午後からの講演になり、参加者からは、厳しい叱責も受けたが、Fu 社長は、顔色もかえず、こころよく諒解していただいた。Fu 社長は、当協会の技術委員を勤めたこともあり、当協会の良き理解者で次回の台湾高雄大会の時は、最高責任者として国際会議を指揮され、高雄大会を一糸乱れず盛會に導いて下さつた。さらに、台湾大会では、川崎製鉄の岩村会長に「日本鉄鋼業の自動化」と題して講演していただいたが、もちろん通訳なしの名調子で講演され、参加者から万雷の拍手を受けた。あとで筆者の英語よりも、岩村会長の英語の方がずっと良かつたと冷やかされ、返事に困つたことを覚えている。岩村会長の講演終了後、China Steel Corp. の T. H. Fu 社長から記念品の贈呈があり、後、筆者が演壇に上がり、感謝と賛辞を述べたまでは良かつたが、後に目がない悲しさ、ひとりでさつさとステージからおりてしまつた。降りたところで、私のアシスタントである Mr. LAGAYAN から、「岩村会長はまだ、ステージに残つておられますよ。」と指摘され、あわててもう一度ステ

ージに上がり、下までお導きしたのを覚えている。200名からなる参加者の前での失敗で今でも赤面のいたりである。

以上は、失敗の教例でしかないが、その他大黒星、小黒星を挙げるときりがない。しかし筆者の失敗を、東洋人的な暖かいハートと笑顔でカバーし、筆者の仕事をバックアップしていただいたのは、各国の代表理事はじめスタッフの方々に、いずれの国際会議も盛会のうちに終了できた。

東南アジア鉄鋼協会で発表される論文のうち、ASEAN 5カ国から発表されるものは、日本鉄鋼協会の共同研究会で発表されるような、現場体験に基づく実務ベースのものが多く、欧米の技術者によつて発表されるものは、新技術、東南アジアで利用できる技術の紹介が中心である。一方日本からの論文は、学協会的なアカデミックなレベルの高いものが多かつた。各国で開催された会議は、東京大会の「鉄鋼製品の新しい市場開発」シンガポール大会の「鉄鋼業のエネルギー利用技術」などメインテーマは指定されてはいるものの論文のレベルが違うため、予稿集の作成や会議の進行には、苦心が必要であつた。しかし、論文の発表者は、各国、各工場の若手の優秀な技術者が中心で、論文発表後の質疑応答で、議長が「時間がありませんので、後で発表者と質問者二人で話して下さい」といわれるケースが多かつた。国際会議開催期間中、東南アジア諸国のパイタリティーや向上意欲を感じたが、それ以上に友情の輪の広がりを感じたことは、筆者にとって幸福であつた。フィリピンの技術委員である ARMCO-MAR STEEL の Mr. R. JAURIGUE は、「この会議に来ると、ちりちりになつて働いている家族に再会するような気がする。」と述懐していただいている。

筆者個人としても、東南アジア鉄鋼協会を通じて、数多くの知己、友人を得た。もちろん各国の代表であり、地位も名誉もある人が多く友人、知己と称してしまえば失礼にあたるが、思い出の残る数人の方を、あえて紹介させていただく。まず、タイの Bangkok Steel Industry 社社長の P. NITHIVASIN 博士は、鉄鋼業のほかホテル等を経営されており、東南アジア鉄鋼協会の良き理解者であり、協力者である。博士の経営するホテルを、タイ大会のため、開放していただき、工場見学やレセプションなど、多大の援助をして下さつた。どんなに多忙であつても、東南アジア鉄鋼協会の会議には参加していただいている。シンガポールの Mr. Ang Kong HUA は、National Iron and Steel Mills の技術担当役員で、当協会の理事であるが、理事長在任中は、合理的、積極的な人柄と暖かいマインドで当協会をリードされた。筆者の在任中、業務のことで良く相談にのつていただいたが、いつも明確適切な判断を賜つた。その他タイの Mr. Ganok BHONGBHIBHAT、フィリピンの Mr. J. MARCELO、

台湾の中国鉄鋼会社の I. Lin CHENG 博士、オーストラリアの Mr. L. J. MILLIN など、枚挙にいとまがないが、それらの人々に共通して言えることは、その民族性、各国の伝統、文化に深く影響された、立派な人格を形成されていたということであつた。

筆者は、日本を離れて、フィリピンに住み、東南アジア各地を訪れて、日本という国を東南アジア人の心や眼で日本を観察することができたと思つている。たしかに東南アジアでは、日本や日本人に対する知識は豊富で、日本人は、勤勉、几張面、時間に正確で、仕事に対する犠牲的精神がある、また、日本の指導者は、先見性があり、部下(後輩)の育成に熱心で先見性がある、など、高い評価を受けている。しかしる東南アジアの日刊誌に「日本は戦前の大東亜共栄圏を完成した。」と題して、東南アジアにおける日本製成品の進出ぶりを冗談とも皮肉ともつかぬ論調で書いてあつた。また、84年秋、フランスの Strassbourg で開かれた国際鉄鋼学会に招待をうけたとき、フランス鉄鋼協会の事務局長が、たまたま、筆者の留学中の同室の友ということもあつて、言いやすかつたのか、「日本は東洋のシェフだからね」と言つて、片目をつぶつて笑いかけたことがある。留学中、彼と「フランスは何故第二次大戦にドイツに勝つたか?」ということで、議論したことがあつたが、私が、「米国のバックアップがあつたから」と単純な現象論をとつたのに対し、彼は、フランスは昔から、科学技術だけでなく、広い文化芸術の分野まで、各国から留学生を呼んでいる。このことが、世界の人々の理解とバックアップを得たのだ」と主張したことがある。つまり彼は、「経済進出だけではね」と言いたかつたのか?

東南アジアで買物をしていると「日本は金持ちだから」と良くいわれたし、一方で「日本はコンサパチブだから」とも批判された。その時、経済優等生に対する彼らのギャップの大きさを嘆く潜在的意識を感じたものだつた。国内でブーメラン効果を心配する論議も十分分かるのだが、少なくとも ASEAN 5カ国に対しては、優等生ではあるが、隣人つき合いをしない日本人にならないよう努力をする必要があるのではないか。もちろん鉄鋼業に絞れば東南アジア鉄鋼協会は、その使命をもつていると言えるが。

筆者の後任として、住友金属工業から鎌倉正司氏が派遣されて事務局長に就任している。東南アジア鉄鋼協会も発足以来15年たち、現在業務の根本的見直しが理事会で決定され、同氏は多忙な毎日を送つておられる。ここで同氏に対して絶大な御後援と御支持をお願いしたい。最後に、日本側の理事として、終始御指示をうけた、日本技術情報センターの田畑新太郎理事長、工業開発研究所の安原武彦専務、新日本製鉄の安生浩専務、および日本側のセクレタリーとして、実務を司どられた、鉄連の戸田弘元海外調査部長に、感謝の意を表したい。